博士論文（要約）

論文題目　　開発主義の構造と心性

　　―戦後日本がダムでみた夢と現実

氏　　名　　町村　敬志

開発主義の構造と心性

目　次

目　次

はしがき　i

序　章　「充たされないもの」のありか
——心性としての「開発」の起源を探る——
……3

1　開発を求める心性の基盤　3
2　歴史的経路としての佐久間ダム　5
3　「開発」という思想、そして夢の彼方に　8
4　国土に充たされていく開発
——スケール、フレーム、イデオロギー、レジーム——　11
5　「開発の時間、開発の空間」の構造分析をめざして　17

第Ⅰ部　国土に充たされていく開発
——開発レジームのスケール重層的な形成過程——

第1章　「残された国土」に充たされていく開発
——戦後復興期における開発ナショナリズム——
……23

1　開発と「国土」の遭遇　25
1-1　『日本経済再建の基本問題』の再検討　25
1-2　組み換えられる「開発」像　27

2　植民地の喪失と「過剰人口」
——イデオロギーとしての「国土」——　30
2-1　植民地喪失の影響　30
2-2　「過剰人口」という問題設定—量の強調による質の忘却　33
2-3　「残された国土」への執着
—列島に向けた空間スケールの引き直し　38

3　「体制」選択と開発　40
3-1　開発と資本主義　40

3-2　「資源の乏しい国・日本」を疑う　42
3-3　「開発は総合的でなければならない」　49
3-4　経済的・技術的問題としての開発へ
—矮小化される「総合」の意味　52

4　「主体化」される開発
——知識人の「理想」から民衆の「啓蒙」へ——　54
4-1　開発のパブリック・リレーションズ　54
4-2　次三男問題と産業開発青年隊
—「国土建設の兵士」とチープレイバーの間　59
4-3　フロンティア開発と教育科学の実践　65

5　おわりに——「山も谷間もアスファルト」への道のり——　71

第2章　郷土建設から県域スケールの開発制度へ
——「開発」化する理想と脱「理想」化する開発——
……73

1　模索される戦後開発
——ローカルな運動とナショナルな政策の狭間で——　73
2　県というスケールにおける開発体制の形成　77
2-1　「郷土建設」としての総合開発　71
2-2　国家による「総合開発」の標準化　79
2-3　浮上する天竜川開発　81

3　「県民運動」としての総合開発　83
3-1　「郷土建設」をめざす「挙県一致」体制の模索　83
3-2　産業開発青年隊の結成—「開発か、保安隊か」の選択の先に　88
3-3　「総合開発」の夢の終焉　97

4　全域化するレジームとしての「開発」
——佐久間から全国へ——　99
4-1　利権化する開発　99
4-2　介入する「用地屋」—佐久間ダム建設と政治　100
4-3　開発利権の全国組織化
—天竜川水系総合開発協力会から日本ダム協会へ　105

5 「開発知」の制度化
——「地域の社会学」の誕生—— 109
5-1 ユネスコ・プロジェクトとしての出発 109
5-2 福武・農村社会学の転機 114
5-3 地域開発の社会学へ 117

6 開発と空間スケール
——運動から政策へ—— 119

第3章 「開発」受け入れのローカルな基盤
——動員と主体化の重層的過程——
…… 125

1 村を充たす「開発の時間、開発の空間」 125
1-1 なぜ佐久間はダムを受け入れたのか 125
1-2 村における「開発の時間、開発の空間」の厚み 130
1-3 「淡い」イデオロギーとしての開発主義 131
1-4 開発のフレーム分析 135

2 地域に刻まれた「開発」の歴史 137
2-1 「金原林」の記憶 137
2-2 近代工場と「繁栄」の記憶 139

3 誘致に向かう主体たち 142
3-1 キーパーソンの「夢」 142
3-2 繕われる語り—作り出される「未開性」 145
3-3 乖離していく電源開発と総合開発 149

4 村の体験としての「開発」 152
4-1 演出される「開発との出会い」 152
4-2 巨大さの語り—開発のグラフィズム 155
4-3 労働者の到来 157
4-4 隠された労働者たち 164

5 割り当てられる「納得」と「決意」
——開発主体とその象徴的基盤—— 169
5-1 開発の浸透と情報ゲイトキーパーの役割 169
5-2 村報が浮き彫りにする「主体」群 172
5-3 居場所を与えられる村民たち 175
5-4 象徴仲介を通じた「支配」構造の再生産 186
5-5 見つめられる経験の累積—観光と視察 189

6 「開発」の終わりへ 193
6-1 嘆きと悲観 193
6-2 「開発」の終わり、そして開発「物語」の始まりへ 196

第4章 ダム建設の記憶とその構造
——「ぶれ」と「濁り」の創発力——
…… 201

1 異なる記憶の収蔵庫としての地域 201
1-1 屈折するダムへの思い 201
1-2 「成長の物語」の根拠 204
1-3 調査の手続き 205

2 記憶の継承と社会的属性 207
2-1 濃い記憶／淡い記憶 207
2-2 年齢による差異 209
2-3 性別による差異 210

3 「開発の記憶」の残り方 211
3-1 ダムが想起されるとき 211
3-2 強い記憶／弱い記憶 213
3-3 消える記憶／消えにくい記憶 215
3-4 開発の語られ方 215

4 ダムを背負い続けるということ 217
4-1 開発への多層的な評価 217
4-2 「没ダム」化する意識の背景—年齢による差異 218

4-3　底流としての「脱ダム」意識—地域による差異　222

5　ポスト「開発」への道　224

5-1　「開発の記憶」の歴史的構造　224

5-2　開発を忘れる力へ　227

5-3　開発と心性—もう一つの「物語」へ　228

第Ⅱ部　表象に埋め込まれていく開発

——開発映像のポリティックス——

第5章　「開発映画」の誕生 …… 231

1　開発と映像　231

1-1　構築／捏造される開発の表象　231

1-2　映像化される淡いイデオロギー　234

2　『佐久間ダム』撮影に至る経緯　237

2-1　岩波映画の誕生　237

2-2　「プロデューサー」中谷宇吉郎の位置　239

2-3　『佐久間ダム』製作に至るまで　243

2-4　「天然色映画」製作の決断　245

2-5　揺れる撮影目的　250

3　『世紀の記録映画』の誕生へ　254

第6章　立ち上げられる開発の表象

——映画『佐久間ダム』は何を描き、何を描かなかったのか——

…… 257

1　二つの「佐久間ダム」映画　257

2　岩波版『佐久間ダム』は、何を描かなかったのか　258

2-1　電化の効用を訴えかけない電力映画　259

2-2　建設者の労苦を描かない建設映画　263

2-3　開発の「犠牲者」を描かないダム映画　269

2-4　建設の「恩人」を描かない記録映画　271

3　切断の論理

——立ち上げられる「開発」表象——　276

3-1「機械のスペクタクル」—モチーフとしての「技術」　277

3-2　露出する「アメリカ」と隠された「アメリカ」　284

4　創出される「思考と行為の新しい領域」

——「開発」する主体の重層的立ち上げ——　288

4-1　啓蒙としての「自然の征服」　289

4-2　「使いこなす主体」としての日本人の再登場　294

4-3　「野郎ども」と「技師たち」の分岐—建設現場の二つの世界　297

5　「意味」の亀裂から立ち上がる「開発」イメージ　304

第7章　『佐久間ダム』を観た／観せたのは誰か

——映像の浸透と再編される権力構造——

…… 307

1「観られた」開発映画としての『佐久間ダム』　307

2　東南アジア映画祭への出品

——仕組まれたグランプリ？——　309

2-1　東南アジア映画祭というイヴェント　309

2-2　「仕組まれた」グランプリ受賞？　314

2-3　「共産主義の油断ならざる浸透」への抵抗
—「反共」の場としての映画祭　317

3　開発主義体制の成立と動員される映像

——戦後開発の視覚的正当化——　320

3-1　中央省庁・議会関係者への上映—開発体制の基礎固め　322

3-2　天皇と開発　325

3-3　海外における上映、外国人に対する上映　327

3-4　体制間競争と映画　330

3-5　電源開発の組織防衛　332

3-6　無言の観衆から都市の大衆へ　333

4 「人間と機械の叙事詩」への道
——「開発」表象の都市的受容—— 334
4-1 鑑賞会での成功 334
4-2 配給上映の実現 337
4-3 『青い麦』との同時上映 340
4-4 都市大衆へ、そして村へ 344

5 「映像」浸透の草の根
——教育映画としての『佐久間ダム』—— 345
5-1 文化映画の遺産 345
5-2 ナトコ時代の到来 346
5-3 「開発」を視聴覚で教育すること 349
5-4 異色な教育映画としての『佐久間ダム』 353
5-5 映し出される「地元」—開発現地・佐久間での上映 356

6 人びとが観たものは何か 358

第8章 可視化と不可視化のポリティックス
——映像化の現場——
…… 363

1 創出された「開発」映像
——介入における二つの段階—— 363
2 「開発映画」誕生の現場 367
2-1 撮影・編集の当初方針 367
2-2 撮影指導の実際 369
2-3 抵抗する演出家 371

3 スポンサード映画における作為とリアル 373
3-1 介入のタイミング 373
3-2 消される「飯場」—『第二部』の場合 374
3-3 「犠牲者」の忘却—『第三部』の場合 380

4 「ロマンと工程」か、技術記録か
——『佐久間ダム・総集編』の製作—— 384

4-1 変化する全体構成 384
4-2 演出家の最後の「反撃」 385
4-3 食い違う思惑 388

5 「巨大ダム建設時代」の映像技師たち 390
5-1 電発プロダクションの存在 390
5-2 永田年—重力ダムにかける執念 392
5-3 意図しない共犯関係—「無垢」な製作者たちの主体性 395

6 ドキュメンタリー映画における「過剰な意味」 399

第9章 映画人たちの動員と抵抗
——「高度経済成長」の先へ——
…… 405

1 大ダム建設時代と映画 405
2 「PR映画の壁」と映画人の「主体性」 407
3 「青年のフシ穴のような瞳」
——高度経済成長へと組み込まれる「開発」表象—— 413
4 テレビの文法
——ヒューマン・ストーリーへの回収、免罪されるダム—— 417
5 岩波映画・その後 421

終 章 新しい「復興」の時代を前にして …… 427
1 戦後開発とは何であったのか 427
2 ぶれ続ける心性の行方 431
3 加担と動員の歴史を繰り返さないために 433

参考文献 …… 439

人名索引 455
事項索引 458
図表索引 464

博士論文の全部がすでに出版されており契約によって全文公表することができないため、以下のとおり、著作の書誌情報を「本文」に代える。

町村敬志
『開発主義の構造と心性――戦後日本がダムでみた夢と現実』
御茶の水書房
2011（平成23）年
ISBN978-4-275-00951-7　C3036

参考文献

阿部彰『人間形成と学習環境に関する映画史料情報集成』風間書房、1993年

Ackerman, Edward（エドワード・A・アッカーマン）「資源の有効利用を図れば日本の将来は明るい――E・A・アッカーマン　1946年11月新聞記者会見――」（経済安定本部資源委員会「資源委員會について」1948年4月20日）、社団法人資源協会『日本の復興と天然資源政策』社団法人資源協会、1986年所収

Ackerman, Edward, *Japanese Resources and United States Policy,* Washington, D.C: U.S. Government Printing Office, 1948, 社団法人資源協会『日本の復興と天然資源政策』社団法人資源協会、1986年所収

足立明「開発と農民――方法論的検討」原洋之助編『地域発展の固有論理』京都大学学術出版会、2000年

足立明「開発の記憶――序にかえて」『民族学研究』67巻4号、2003年

足立正生『映画／革命』河出書房新社、2003年

愛知県『天竜東三河特定地域総合開発計画案　愛知県分』愛知県、1952年10月

相川陽一「PR映画から自主製作映画へ――反開発映画における『加担のドキュメンタリー』の系譜――」町村敬志編『開発の時間・開発の空間――佐久間ダム再考――』開発史研究会、2004年

「赤い街・青い街」『アサヒグラフ』1956年6月24日号

安芸皎一『国土の総合開発』岩崎書店、1952年

雨宮昭一「既成勢力の自己革新とグライヒシャルトゥング――総力戦体制と中間層」山之内靖・J. V. コシュマン・成田龍一編『総力戦と近代化』柏書房、1995年

有澤広巳『再軍備の経済学』東京大学出版会、1953年

新しい教材研究会「実験教室　社会科におけるスライド学習利用」『新しい教材』（『北海道視聴覚教育』改題）1956年2月号

伴野昭人『北海道開発局とは何か――GHQ占領下における「二重行政」の始まり』寿郎社、2003年

米国大使館映画部『ＵＳＩＳ映画目録　1957年版』米国大使館、1957年

Benford, Robert D and David A. Snow, "Framing Processes and Social Movements: An Overview and Assessment," *Annual Review of Sociology*, Vol. 26, 2000

『別冊１億人の昭和史　日本ニュース映画史　開戦前夜から終戦直後まで』毎日新聞社、1977年

電源開発調査課「共産諸国の東南アジア進出――技術指導に重点――」『電源』1956年９月号

電源開発株式会社「佐久間系統　遂に完成！」『電源』1956年10月号

電源開発株式会社佐久間建設所『佐久間発電所計画概要』電源開発株式会社、1956年

電発プロダクション「映画佐久間ダムは完成した」『電源』1959年１月号

Dower, John W., *Embracing Defeat: Japan in the Wake of World War II*, New York: W.W. Norton and Company, 1999, 三浦陽一・高杉忠明訳『敗北を抱きしめて：第二次大戦後の日本人』下巻、岩波書店、2001年

Eagleton, Terry, *Ideology: An Introduction*, London: Verso, 1991, 大橋洋一訳『イデオロギーとは何か』平凡社（平凡社ライブラリー版）、1999年

社団法人映画産業団体連合会『十年の記録』社団法人映画産業団体連合会、1960年

社団法人映像文化製作者連盟編『日本短編映像秀作目録――映像作品でみる日本の100年』社団法人映像文化製作者連盟、1999年

Escobar, Arturo, *Encountering Development: The Making and Unmaking of the Third World*, Princeton: Princeton University Press, 1995

Esteva, Gustavo, "Development," Wolfgang Sachs ed., *The Development Dictionary: A Guide to Knowledge as Power*, London: Zed Books 1992,「開発」、三浦清隆他訳『脱「開発」の時代――現代社会を解読するキーワード辞典』晶文社、1996年

Flyvbjerg, Bent, Nils Bruzelius, and Werner Rothengatter, *Megaprojects and Risk: An Anatomy of Ambition*, Cambridge: Cambridge University Press, 2004

藤井仁子「柳田国男と文化映画――昭和10年代における日常生活の発見と国民の創造／想像」長谷正人・中村秀之編『映画の政治学』青弓社、2003年

藤井信幸『地域開発の来歴――太平洋ベルト地帯構想の成立』日本経済評論社、2004年

藤原帰一「ナショナリズム・冷戦・開発――戦後東南アジアにおける国民国家の理念と制度」東京大学社会科学研究所編『20世紀システム４　開発主義』東京大学出版会、1998年

深井純一『水俣病の政治経済学――産業史的背景と行政責任』勁草書房、1999年

福武直編『アメリカ村――移民送出村の実態』東京大学出版会、1953年

福武直「残された村の行方は――佐久間ダムの調査」『東京大学学生新聞』1956年８月13日、福武直『福武直著作集　別巻　社会学四十年』東京大学出版会、1976年所収

福武直「はしがき」日本産業開発青年協会『産業開発青年隊の実態』日本産業開発青年協会、1957年

福武直「序文屋」『毎日新聞』1958年７月30日

福武直「農村と民主主義――帰郷運動の今日的意味――」『世界』177号、1960年９月

福武直『福武直著作集　別巻　社会学四十年』東京大学出版会、1976年

福武直・他「農村における“声なき声”の実態――安保問題および議会政治をめぐる態度調査から――」『思想』436号、1960年10月

福武直・島崎稔「『近代技術の社会的影響』調査報告」『ユネスコ資料６』日本ユネスコ国内委員会、1961年９月

布施鉄治「農民の生産意欲分析に関する理論的枠組み」『産研研究報告書』第１号、1962年、『布施鉄治著作集　調査と社会理論　上巻　実証研究』北海道大学図書刊行会、2000年所収

外務省調査局「今後の国内経済施策に関する一考察」（一九四五年九月一八日、外務省調査局・国内経済資料第二六号）、有澤広巳監修、中村隆英編『資料・戦後日本の経済政策思想　第１巻　日本経済再建の基本問題』東京大学出版会、1990年所収

外務省調査局『特別調査委員会報告　日本経済再建の基本問題』（調三資料第九号）、1946年３月

外務省調査局『改訂基本問題』有沢広巳監修、中村隆英編『資料・戦後日本の経済政策思想　第１巻　日本経済再建の基本問題』東京大学出版会、1990年所収

Gluck, Carol "The Past in the Present," Gordon, Andrew, ed., *Postwar Japan as History*, Berkeley : University of California Press, 1993,「現在のなかの過去」、中村政則監訳『歴史としての戦後日本』(上)、みすず書房、2001年
後藤道夫『収斂する日本型<大衆社会>――経済的グローバリズムと国民の分裂』旬報社、2001年
浜本篤史編著『御母衣ダムと荘白川地方の50年』まつお出版、2011年
英映画社『佐久間ダム建設記録第一集』(パンフレット)、1955年
羽田澄子『映画と私』晶文社、2002年
羽仁進「羽仁進監督の語る岩波映画『吉野馨治さんの夢は、未だに誰も実現していないと思うのです』」『ＮＦＣニューズレター』35号、2001年1-2-3月
長谷部成美『佐久間ダム』東洋書館、1956年
橋本健二『階級・ジェンダー・再生産』東信堂、2003年
蓮見音彦「地域開発の虚構と現実」福武直編『地域開発の構造と現実　3』東京大学出版会、1965年
蓮見音彦「地域社会学会の創設の頃」『会報』(地域社会学会) 100号、1999年
株式会社間組『佐久間ダム』間組、1953年6月
間組百年史編集委員会『間組百年史――1889～1945』間組、1989年
間組百年史編集委員会『間組百年史――1945～1989』間組、1990年
東晃『雪と氷の科学者　中谷宇吉郎』北海道大学図書刊行会、1997年
広瀬貞三「水豊発電所建設による水没地問題――朝鮮側を中心に――」『朝鮮学報』第139輯、1991年4月
広重徹『科学の社会史』(上・下)、岩波書店(岩波現代文庫版)、2003年(初出1973年)
北海道大学『北海道百年史　部局史』北海道大学、1980年
本間義人『国土計画の思想――全国総合開発計画の30年』日本経済評論社、1992年
飯田心美「記録映画と観客層」『キネマ旬報』第100号、1954年9月
飯田俊「映画『佐久間ダム』について(1)――ＰＲ手段としての映画――」『調査資料』No.8、電源開発株式会社、1955年
飯田俊「映画『佐久間ダム』について(2・完)――ＰＲ手段としての映画――」『調査資料』No.9、電源開発株式会社、1955年

株式会社IMAGICA『光へ人へ　IMAGICA　映像の55年』株式会社IMAGICA、1992年
井上英之『検証・ゴジラ誕生――昭和29年東宝撮影所』朝日ソノラマ、1994年
入江為年監修、朝日新聞社編『入江相政日記』第3巻、朝日新聞社、1990年
石井洋二郎「思想としての開発」川田順造ほか編『岩波講座　開発と文化　2　歴史のなかの開発』岩波書店、1997年
伊藤守「公共の記憶をめぐる抗争とテレビジョン」伊藤守編『メディア文化の権力作用』せりか書房、2002年
伊藤俊治『20世紀写真史』筑摩書房、1988年
岩上二郎「鹿島開発の構想」エコノミスト編集部編『証言・高度成長期の日本(上)』毎日新聞社、1984年
岩本茂樹『戦後アメリカニゼーションの原風景――『ブロンディ』と投影されたアメリカ像――』ハーベスト社、2002年
岩波映画製作所『佐久間ダム(撮影プラン及び第二・三集構成概要)』1954年5月5日
岩波映画製作所『構成概要　佐久間ダム第六集　完成篇(全三巻)――検討用――』1954年8月5日
岩波映画製作所『佐久間ダム第二部　アナウンス原稿　初稿――検討用――』1955年2月21日
岩波映画製作所『構成概要(その2)　佐久間ダム第三部』1955年10月20日
岩波映画製作所『佐久間ダム第三部　カット表』1957年4月9日
岩波映画製作所『映画祭と映画コンクール』(業務参考資料No.13)、岩波映画製作所、1963年
岩波映画製作所編『作品目録』1970年
岩波映画製作所編『作品経歴　件名別』1971年
岩波映画製作所編『作品経歴――作品別　1971.3.』1971年
Japan Cultural Science Society, (compiled), *Construction of the Sakuma Dam for the Electric Power Development and its Effect on Local Communities*, Tokyo: Japanese National Commission for UNESCO, 1959
The Japan Dam Association (日本ダム協会), *Japan's Dam Skill at World's Top Level*, 日本ダム協会, 1958

海後宗臣「国土総合開発と教育」『国土』第２巻20号、1952年11月、『海後宗臣著作集　第二巻　教育の社会的基底と編成』東京書籍、1990年所収
亀井文夫『たたかう映画――ドキュメンタリストの昭和史――』岩波書店、1989年
神山育美「佐久間ダム開発と地域婦人会活動――戦後日本における民主主義と女性」町村敬志編『開発の時間　開発の空間』東京大学出版会、2006年
狩谷太郎「映画佐久間ダムの回想」『電源』1959年１月号
加藤剛「開発と革命の語られ方――インドネシアの事例から――」『民族学研究』67巻４号、2003年
Katz, Elihu and Paul F. Lazarsfeld, *Personal Influence: The Part Played by People in the Flow of Mass Communications,* Glencoe, Ill.: Free Press, 1955, 竹内郁郎訳『パーソナル・インフルエンス――オピニオン・リーダーと人々の意思決定――』培風館、1965年
川喜多長政「日本映画の国際進出」『キネマ旬報』第80号、1954年
河村雅美「ダム建設という『開発パッケージ』――『外地』から『国土』そして『アジア』へ――」町村敬志編『開発の時間　開発の空間』東京大学出版会、2006年
川崎賢子・原田健一『岡田桑三　映像の世紀――グラフィズム・プロパガンダ・科学映画』平凡社、2002年
橘川武郎『日本電力業発展のダイナミズム』名古屋大学出版会、2004年
木村武「替地造成農地補償のあり方について（２）」『調査資料』、No.7、電源開発株式会社、1955年
『キネマ旬報』「1954年度短篇映画決算」『キネマ旬報』第108号、1955年１月
木之内秀彦「冷戦体制と東南アジア」池端雪浦ほか編『岩波講座東南アジア史８　国民国家形成の時代』岩波書店、2002年
北井三子夫「補償について二、三の問題」『さくま』第２号、1953年
北井三子夫「山村の厳しい現実に挑もう」『広報さくま』第146号、1971年
北井三子夫「広く町民の研修の場と　日本一住みよい佐久間町の将来を求めて」『広報さくま』第171号、1973年
北井三子夫「自然の中に文化を　昭和51年を迎えて」『広報さくま』第185号、1976年
北井三子夫「佐久間ダム建設の理想と現実」佐久間町『佐久間町史　下巻』佐久間町役場、1982年所収

北井三子夫『天竜の山村に生きて』自費出版、1983年
経済安定本部経済計画室監修『日本経済の地域構造』東洋書館、1950年
経済安定本部資源委員会事務局「資源委員会設立経過概要」（経、資、総、第一号、1948年３月１日）、社団法人資源協会『日本の復興と天然資源政策』社団法人資源協会、1986年所収
経済安定本部資源調査会「Ｒ．Ｃ．ノート」『資源』（経済安定本部資源調査会）３・４号、1950年
経済企画庁編『経済企画庁総合開発行政の歩み』大蔵省印刷局、1975年
建設省計画局編『きり拓かれてゆく日本――国土総合開発読本』日本週報社、1953年
建設省五十年史編集委員会『建設省五十年史（Ｉ）』建設広報協議会、1998年
城戸幡太郎「私の構想――北海道開発計画と視聴覚教育――」『視聴覚教育』1951年10月号
城戸幡太郎「教育科学と教育計画」『北海道大学教育学部紀要』31号、1978年
『記録映画』「シンポジウム　科学映画を科学する」『記録映画』1959年７月号
『記録映画』「座談会　ＰＲ映画と我々の創造的課題」『記録映画』1962年６月号
小林甫「＜生活教育＞研究と＜生活社会学＞の視座――留岡生活教育論・篭山生活構造論と布施生活社会学――」『北海道大学教育学部紀要』65号、1995年
小林淳『伊福部昭の映画音楽』ワイズ出版、1998年
児玉麗音「佐久間ダム建設という『技術の勝利』――教科書・児童書による開発と科学の構築」町村敬志編『開発の時間　開発の空間』東京大学出版会、2006年
児玉隆也「チッソだけが、なぜ」児玉隆也『淋しき越山会の女王他六編』岩波書店、2001年所収（初出1973年）
小磯修二・山崎幹根編『戦後北海道開発の軌跡――対談と年表でふりかえる開発政策』財団法人北海道開発協会、2007年
小泉和子編『占領軍住宅の記録（下）』住まいの図書館出版局、1999年
小島直記『松永安左エ門の生涯』「松永安左エ門伝」刊行会、1980年
国土計画協会編『日本の国土総合開発計画』東洋経済新報社、1963年
財団法人国民経済研究協会、社団法人金属工業調査会編『戦後日本の経済構造』（産業構造検討資料第四輯）、1946年12月（謄写版）

小松和彦「『たましい』という名の記憶装置――『民俗』という概念をめぐるラフ・スケッチ」小松和彦編『記憶する民俗社会』人文書院、2000年
工務部門技術史「先達に学ぶ」編集委員会編『工務部門―技術史　先達に学ぶ』電源開発株式会社、1998年
小関隆「コメモレイションの文化史のために」阿部安成・小関隆・見市雅俊・光永雅明・森村敏己編『記憶のかたち――コメモレイションの文化史』柏書房、1999年
国正武重編『「一票差」の人生――佐々木良作の証言』朝日新聞社、1989年
黒木和雄「サービス精神の方法――「海壁」を支えるもの――」『記録映画』1959年9号
黒木和雄「演出と思想――現状報告――」『記録映画』1961年10号
黒木和雄「とりとめのない話」シグロ編『ドキュメンタリー映画の現場』現代書館1989年
草壁久四郎『映像をつくる人と企業――岩波映画の三十年』みずうみ書房、1980年
Lilienthal, David E., *TVA: Democracy on the March*, New York: Harper & Brothers, 1943, 和田小六訳『TVA――民主主義は進展する』岩波書店、1949年
Lilienthal, David E., *The Journals of David E..Lilienthal 3: The Atomic Energy Years (1947 – 1950)*, New York: Harper & Row, 1964, 末田守・今井隆吉訳『リリエンソール日記　Ⅲ　原子力の時代』みすず書房、1969年
Lyotard, Jean François, *La condition postmoderne*, Paris: Éditions de Minuit, 1979, 小林康夫訳『ポスト・モダンの条件：知・社会・言語ゲーム』書肆風の薔薇、1986年
毎日新聞社人口問題調査会編『日本の人口問題』毎日新聞社、1950年
町村敬志「『豊かさ』の語りの行方――『地域開発』という思考の転機――」『都市問題研究』51巻2号、1999年
町村敬志「『国土』に充たされていく開発――戦後復興期の開発ナショナリズム――」『ポリティーク』Vol.5、2002年
町村敬志「開発主義の終焉か、新しい開発主義か――誰のために『開発』は語られるのか――」渡辺治編『変貌する＜企業社会＞日本』旬報社、2004年
町村敬志編著『開発の時間・開発の空間――「佐久間ダム」再考』（科学研究費報告書2003年度）開発史研究会、2004年

町村敬志編著『開発の時間　開発の空間――佐久間ダムと地域社会の半世紀』東京大学出版会、2006年
町村敬志「戦後日本における映像体験と社会統合――映画『佐久間ダム』上映過程と『観る』主体の形成――」『一橋社会科学』No.1、2007年
町村敬志「『過剰人口』から『縮小社会』へ――戦後開発における＜スケールの語り＞の動員力」『地域社会学会年報』第20集、2008年
丸山博「記録映画における広報性――『佐久間ダム』分析――」『日本大学芸術学部紀要』第18号、1988年
松川八洲雄「P・R映画とドキュメンタリー方法論の問題　人間と胃袋のためのプログラム」『記録映画』1959年12号
松尾一郎「企業訪問＜岩波映画製作所＞三つのイメージの崩壊」『記録映画』1962年4号
松下圭一「＜市民＞的人間型の現代的可能性」松下圭一『戦後政治の歴史と思想』筑摩書房（ちくま学芸文庫版）、1994年、（1966年初出）
御厨貴「国土計画と開発政治――日本列島改造と高度成長の時代――」『年報政治学　1995　現代日本政官関係の形成過程』岩波書店、1995年
御厨貴『政策の総合と権力――日本政治の戦前と戦後』東京大学出版会、1996年
民間教育史料研究会・中内敏夫・田嶋一・橋本紀子編『教育科学の誕生』大月書店、1997年
Misztal, Barbara A., 2003, *Theories of Social Remembering*, Maidenhead: Open University Press,
宮原将平「平和の科学と戦争の科学」『北大季刊』第7号、1955年
三宅晴輝『新興コンツェルン読本（日窒・森・日曹・理研）』（日本コンツェルン全書11）春秋社、1937年
宮本憲一「地域開発」国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第9巻、吉川弘文館、1988年
宮本常一『私の日本地図1　天竜川にそって』同友館、1967年
宮永次雄「教育映画の『場』と傾向」『キネマ旬報』第95号、1954年7月
宮田伊知郎「『理想追求への火』――TVA思想、民主化、そして自立」町村敬志編『開発の時間　開発の空間』東京大学出版会、2006年

森脇達夫「日本の文化短篇映画」『キネマ旬報』第95号、1954年7月
村上泰亮『反古典の政治経済学——進歩史観の黄昏』下巻、中央公論社、1992年
苗田康夫「ＰＲ映画に出口があるか」『記録映画』1963年1号
長沢亮太「産業開発青年隊の本質と沿革」財団法人日本産業開発青年協会『産業開発青年隊の実態』（昭和31年度）、財団法人日本産業開発青年協会、1957年
永田雅一（談）「東南アジア制作者連盟の結成」『キネマ旬報』第80号、1953年
永田年「堰堤の設計に就て」（一）～（八）『水利と土木』第1巻2号、1928年～第2巻8号、1929年
永田年「遂に天龍川は流れを変えた！——大自然への挑戦『佐久間ダム』建設の記録——」『文藝春秋』1955年6月号
永塚利一『久保田豊』電気情報社、1966年
中村隆英「概説　1937-54年」中村隆英編『日本経済史7「計画化」と「民主化」』岩波書店、1989年
中野聡「賠償と経済協力——日本・東南アジア関係の再形成——」池端雪浦ほか編『岩波講座東南アジア史8　国民国家形成の時代』岩波書店、2002年
中内敏夫「序論　1930-40年代の生活世界と教育科学研究会史の研究課題」民間教育史料研究会・中内敏夫・田嶋一・橋本紀子編『教育科学の誕生』大月書店、1997年
中谷宇吉郎『沙漠の征服——アメリカの国土開發——』岩波書店、1950年
中谷宇吉郎「奇跡の町——アメリカ国土開発の一挿話——」『資源』3／4号、1950年6月
中谷宇吉郎「ダムの埋没——これは日本の埋没にも成り得る——」『文藝春秋』1951年11月号
中谷宇吉郎『日本の発掘』法政大学出版局、1952年
中谷宇吉郎「軍事研究とは何か」『北大季刊』第7号、1955年
南部圭之助『映画宣伝戦——あなたが映画館に引きよせられるまで』同文館、1956年
日本人文科学会編『佐久間ダム——近代技術の社会的影響——』東京大学出版会、1958年
日刊建設工業新聞社「座談会　赤信号の電源開発工事を衝く」『建設時報』1952年11月号（特集電源開発と建設機械化）

財団法人日本産業開発青年協会『産業開発青年隊の実態』（昭和31年度）、財団法人日本産業開発青年協会、1957年
野田真吉「戦後記録映画運動についての一考察——記録映画製作者協議会の活動について」『記録映画』1959年2号
野田真吉『ある映画作家——フィルモグラフィ的自伝風な覚え書』泰流社、1988年
野口雄一郎・佐藤忠男「ドキュメンタリーの新しい波／岩波映画製作所」（撮影所研究　第10回）『映画評論』1961年7月号、佐藤忠男・岸川真編『映画評論の時代』カタログハウス、2003年所収
野口悠紀雄『1940年体制——「さらば戦時経済」』東洋経済新報社、1995年
農林省農業改良局生活改善課編『図説　農家の生活改善』朝倉書店、1954年
野添憲治『開拓農民の記録——日本農業史の光と影』社会思想社、1996年（初出1976年）
帯谷博明『ダム建設をめぐる環境運動と地域再生——対立と協働のダイナミズム』昭和堂、2004年
落合林吉「産業開発青年隊」『建設時報』（建設省監修）第5巻第10号、1953年
尾高朝雄、「序」『人文』（日本人文科学会編）1、有斐閣、1951年
尾高朝雄、「序」、日本人文科学会編『近代鑛工業と地域社会の展開』東京大学出版会、1955年
小川紳介著、山根貞男編『映画を穫る——ドキュメンタリーの至福を求めて』筑摩書房、1993年
荻野昌弘「文化遺産への社会学的アプローチ」荻野昌弘編『文化遺産の社会学——ルーブル美術館から原爆ドームまで——』新曜社、2002年
小口禎三『映画ひとすじ五十年』小口禎三傘寿記念出版会、1997年
小熊英二『清水幾太郎——ある戦後知識人の軌跡』（神奈川大学評論ブックレット26）御茶の水書房、2003年
岡田秀則「<征服>から<加担>へ——1950～60年代日本のノンフィクション映画素描」『ＮＦＣニューズレター』35号（2001年1-2-3合併号）
岡本拓司「電力供給体制の確立」中山茂・後藤邦夫・吉岡斉編『通史　日本の科学技術2　自立期　1952-1959』学陽書房、1995年
岡本達明・松崎次夫編『聞書　水俣民衆史5　植民地は天国だった』草風館、1990

年
大川英三『鉱山の一生』講談社出版サービスセンター、1974年
大来佐武郎『エコノミストの役割』日本経済新聞社、1973年
王子製紙株式会社『王子製紙社史　本編　1873-2000』王子製紙株式会社、2001年
大森とく子「解題（第1巻　日本経済再建の基本問題）」有澤広巳監修、中村隆英編『資料・戦後日本の経済政策思想　第1巻　日本経済再建の基本問題』東京大学出版会、1990年
小野善之「統計よりみた静岡県在留朝鮮人の歴史的状況」『静岡県史研究』第10号、1994年
大沢伸生・伊東孝『ダムをつくる——黒四・佐久間・御母衣・丸山』日本経済評論社、1991年
大島正明「スポンサー教育序説」『記録映画』1960年4号
大塩武『日窒コンツェルンの研究』日本経済評論社、1989年
大谷健『興亡——電力　民営・分割の葛藤』白桃書房、1984年（初出は、産業能率大学出版部、1978年）
大谷省三『国土の改造——われわれは豊かになれるか——』（村の図書室）岩波書店、1953年
大淀昇一『技術官僚の政治参画——日本の科学技術行政の幕開き』中央公論社、1997年
Poerksen, Uwe, *Plastic Words: The Tyranny of a Modular Language*, translated by Jutta Mason and David Cayley, The Pennsylvania State University Press, 1995（ドイツ語版原著 1988年刊行）糟谷啓介訳『プラスチック・ワード——歴史を喪失したことばの蔓延』藤原書店、2007年
斎藤壽夫『回顧』非売品、1979年
酒井三郎『昭和研究会——ある知識人集団の軌跡』講談社（講談社文庫版）、1985年
佐久間町『佐久間町史　下巻』佐久間町役場、1982年
佐久間町『佐久間町統計45年』佐久間町役場、2002年
桜井義秀「近代・開発の言説支配と対抗的社会運動」『現代社会学研究』（北海道社会学会）8、1995年
産業開発青年隊二十年史編さん委員会『産業開発青年隊二十年史』建設省建設大学

校中央訓練所、1973年
札幌市『北海道大博覧会誌』札幌市、1959年
佐藤秀太郎『王子製紙中部工場おぼえ書』財団法人紙の博物館、1980年
佐藤仁『「持たざる国」の資源論——持続可能な国土をめぐるもう一つの知』東京大学出版会、2011年
佐藤寛「戦後日本の農村開発経験——日本型マルチセクターアプローチ——」『国際開発研究』11巻2号、2002年
佐藤忠男『日本記録映像史』評論社、1977年
関野嘉雄「佐久間ダム　三巻」（「今月の教育映画から——鑑賞指導と学習の手引」欄）、『視聴覚教育』1954年7月号
島崎稔「『近代技術の社会的影響』調査によせて（第四年度までの調査概要）」（日本人文科学会編『ダム建設の社会的影響』東京大学出版会、1959年初出）、高橋明善編『島崎稔・美代子著作集　第7巻ダム建設と地域社会』礼文出版、2004年
島崎稔「農政と社会学者」『福武直著作集　第7巻』東京大学出版会、1976年
清水幾太郎「佐久間ダム」『婦人公論』1956年2月号
清水幾太郎「テレビジョン時代」『思想』1958年11月号、同2003年12月号再録
清水康幸「開拓地北海道の子どもたちと教師」民間教育史料研究会・中内敏夫・田嶋一・橋本紀子編『教育科学の誕生』大月書店、1997年
下河辺淳「新全総にかけた夢」エコノミスト編集部『証言·高度成長期の日本（上）』毎日新聞社、1984年
静岡県弘報企画課『第2次静岡県総合開発計画書　現況の部』1952年7月1日
静岡県『天龍東三河特定地域地域開発効果測定調査報告書　モデル地区開発調査（佐久間発電所建設事業が佐久間町に及ぼした影響）昭和32年度』静岡県、1958年3月
Snow, David A., E. Burke Rochford, Jr., Steven K. Worden, and Robert D. Benford, "Frame Alignment Processes, Micromobilization, and Movement Participation," *American Sociological Review*, 1986, Vol.51
総合政策研究会著、土屋清・大来佐武郎監修『日本の地域開発』ダイヤモンド社、1963年
末廣昭「発展途上国の開発主義」東京大学社会科学研究所編『20世紀システム

4　開発主義』東京大学出版会、1998年
末廣昭『キャッチアップ型工業化論――アジア経済の軌跡と展望』名古屋大学出版会、2000年
鷲見一夫『三峡ダムと日本』築地書館、1997年
鈴木修次編『日本一の佐久間ダム』天竜川水系総合開発協力会、1955年
高橋明善「編集にあたって」『島崎稔・美代子著作集　第7巻ダム建設と地域社会』（高橋明善編）礼文出版、2004年
高村武次『佐久間ダム撮影報告』（謄写版）、岩波映画製作所、1957年
高村武次「勇気と決断と意志」『電源』1959年1月号
高崎哲郎『評伝　技師・青山士の生涯』講談社、1994年
高杉晋吾『日本のダム』三省堂、1980年
田中純一郎『日本教育映画発達史』蝸牛社、1979年
田中研之輔「佐久間ダム開発後の山村生活――ある木材業者とその家族の暮らしぶり――　」町村敬志編『開発の時間　開発の空間』東京大学出版会、2006年
田中滋・水垣源太郎「戦後日本のダム開発とナショナリズム――ナショナリゼーション論にもとづく分析」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』第7号、2005年
谷川建司『アメリカ映画と占領政策』京都大学学術出版会、2002年
天竜川現地調査班（水制度部会）『天竜川現地調査報告書』1953年7月23日
天竜川水系総合開発協力会「天竜川水系総合開発協力会趣意書」1952年12月10日、静岡県『静岡県史　資料編21　近現代六』静岡県、1994年所収
寺田篤生「ポスト佐久間ダム開発期における地域文化統合様式の歴史的変容」町村敬志編『開発の時間　開発の空間』東京大学出版会、2006年
鳥羽耕史『1950年代――「記録」の時代』河出書房新社、2010年
留岡清男「村づくりと人」『北海道大学教育学部紀要』第5号、1957年
留岡清男『教育農場五十年』岩波書店、1964年
酉水孜郎編『資料・国土計画』大明堂、1975年
東和映画株式会社『東和映画の歩み』東和映画株式会社、1955年
Truman, Harry S., *Memories by Harry S. Truman: Years of Trial and Hope*, New York: Doubleday, 1956 加瀬俊一監修、堀江芳孝訳『トルーマン回顧録　試練と希望の年月　2』恒文社、1966年
土本典昭『映画は生きものの仕事である』未來社、1974年

土本典昭『わが映画発見の旅――不知火海水俣病元年の記録』日本図書センター、2000年（初出1979年）
土本典昭・石坂健治『ドキュメンタリーの海へ――記録映画作家・土本典昭との対話』現代書館、2008年
土屋清『日本総力戦経済論』柏葉書院、1944年
土屋喬雄監修、金原治山治水財団編『金原明善』（非売品）、金原治山治水財団、1968年
津田剛「村に入り込む――琵琶湖畔の一教師の記録」『視聴覚教育』1952年4月号
都留重人『米国の政治と経済政策――ニュー・ディールを中心として――』有斐閣、1944年
都留重人「日本経済の戦後二〇年」『経済評論』1965年10月号臨時増刊
都留重人『都留重人自伝　いくつもの岐路を回顧して』岩波書店、2001年
内田隆三『国土論』筑摩書房、2002年
上野耕三『回想録』記録映画社、1980年
梅棹忠夫「黒部峡谷――そこでは今おどろくべきことが始まっている――」『総合』1957年8月号
海野福寿・小池善之「鉱山における強制連行朝鮮人――『厚生省調査報告書』の分析――」『静岡県史研究』第11号、1995年
宇野重昭「チッソ企業論」色川大吉編『水俣の啓示――不知火海総合調査報告（下）』筑摩書房、1983年
山田風太郎『戦中派不戦日記』（新装版）講談社（講談社文庫版）、2002年（初出1971年）
山本唯人「佐久間ダム建設と流域経済圏の変容――水利権の視点から――」町村敬志編『開発の時間　開発の空間』東京大学出版会、2006年
山之内靖・J. V. コシュマン・成田龍一編『総力戦と現代化』柏書房、1995年
山崎幹根『国土開発の時代――戦後北海道をめぐる自治と統治』東京大学出版会、2006年
安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』平凡社（平凡社ライブラリー版）、1999年（初出　青木書店、1974年）
吉原順平『日本の技術　9　日本の産業技術映画』（日本産業技術史学会監修）第一法規出版、1989年

吉野馨治「カミナリと名作」『電源』1959年1月号
尹明憲「朝窒による電源開発」姜在彦編『朝鮮における日窒コンツェルン』不二出版、1985年
若林敬子『日本の人口問題と社会的現実——第Ⅱ巻 モノグラフ篇』東京農工大学出版会、2009年

人名索引

ア

青山士　97, 98
安芸皎一　26, 34, 44, 47, 55, 56, 58, 149
足立明　16, 133, 225
足立正生　411
アッカーマン、エドワード・A (Ackerman, Edward A.)　44-46, 48, 52
雨宮昭一　13, 26
有澤広巳　26, 29, 41, 44, 50, 51, 58
飯田心美　335
飯田俊　247, 258, 388
飯沼一省　58
イーグルトン、テリー (Eagleton, Terry)　133, 134
石川一郎　26
伊勢長之助　374, 401, 402
稲葉秀三　26, 31, 32, 34, 44
井上晴丸　26
伊福部昭　281
上野耕三　408
氏原正治郎　111
内田隆三　38, 183
宇野弘蔵　26
宇野重昭　37
梅棹忠夫　302-304
梅津美治郎　274
江口英一　111
エスコバール、アルトゥーロ (Escobar, Arturo)　14, 277, 288
大内兵衛　26
大来佐武郎　25, 26, 44, 46, 47, 53, 240, 331, 341, 394
太田仁吉　311, 335
大谷省三　180, 291
大野数雄　46
大野伴睦　101-107, 189, 190
岡田桑三　262, 327
岡田秀則　401
小川紳介　408, 421
荻野昌弘　212
小口禎三　238, 250
落合林吉　63-65
帯谷博明　14

カ

海後宗臣　59, 60, 68
狩谷太郎　248, 258, 337, 389
川喜多長政　313, 338
神部満之助　106, 157, 174, 297, 299-302
岸信介　274
北井三子夫　91, 95, 126, 143-152, 174, 196, 198
北川隆吉　90, 111
城戸幡太郎　66, 69-70, 349-351
金原明善　88, 137-139
久保田豊　58, 243, 272, 273, 329
クラップ、ゴードン (Clapp, Gordon)　47, 190, 242
黒木和雄　408, 410-417, 434

論文の内容の要旨

論文題目　　開発主義の構造と心性――戦後日本がダムでみた夢と現実

氏　　名　　町村敬志

1　論文の課題

戦後日本は、なぜかくも開発へと深く依存する社会となったのか。

本論文は、1956 年に完成された戦後初の巨大プロジェクト、佐久間ダムを対象に、その建設をめぐる重層的かつ多面的な出来事の連鎖が結果的に、今日まで続く開発主義の構造と心性を形成する上で重要な経路としての役割を果たしたことを、多方面にわたる実証によって明らかにする。

研究史を振り返ると、冒頭の問いに対してはこれまで、大別して２つの視角から取り組みがなされてきた。第１に、戦後開発の歴史的起点に着目をするアプローチ（歴史アプローチ）、第２に、市場経済と政府主導の開発という異なる政治経済的要因が高度成長期において連接させられる過程に着目するアプローチ（政治経済学アプローチ）、がそれである。このうち歴史アプローチはさらに、戦後開発を「総力戦体制からの連続性」により理解する立場と、開発を「戦後レジーム」と見なす立場に分かれる。また、政治経済学アプローチは、開発を「市場経済を補完し成長に貢献する」部門として見る立場と、開発を「高度成長のもたらした格差・矛盾への対応」としてみる立場とに大別できる。

だが、以上の研究史を全体として見た場合、そこには次のような課題が残されていた。

第１に、歴史アプローチが戦前・戦後の接続形態に議論を集中するのに対し、政治経済学アプローチは高度成長期における開発の作用を主要な検討対象とする。両者の間には時代設定の面でも論点の面でも明らかなズレがあった。なぜ戦後復興期に他ならぬ「開発」が新た

に政策テーマとして浮上したのか。また、なぜ「開発」という新施策は、高度成長期の主要政策となるまでに拡大していったのか。冒頭の問いに答えるためには、これらの点が明らかにされる必要がある。

第２に、歴史アプローチにせよ、また政治経済学アプローチにせよ、各説はいずれも、国家レベルの政治経済現象としての開発に焦点を当てる。しかし、開発を「上から」の動員過程としてだけ見るのは適当ではない。開発が全国化する前提には、広範な人びとによって開発が「受容」されていく社会的・文化的過程が存在している。両アプローチにはこの点の分析が欠けていた。

本論文は、復興から高度成長に向かう分岐点に位置する巨大プロジェクト「佐久間ダム」を対象に、国家／中央を起点とする開発政策が、政治・経済・社会・文化などの多様な回路を経ながら、人びと——ダムサイトの村人だけでなく、都市の大衆も含め——の生活世界へと浸透していく重層的過程を明らかにすることを課題とする。

２　論文の構成

序章　「充たされないもの」のありか——心性としての「開発」の起源を探る

第Ⅰ部　国土に充たされていく開発——開発レジームのスケール重層的な形成過程——

第１章　「残された国土」に充たされていく開発——戦後復興期における開発ナショナリズム——

第２章　郷土建設から県域スケールの開発制度へ——「開発」化する理想と脱「理想」化する開発——

第３章　「開発」受け入れのローカルな基盤——動員と主体化の重層的過程——

第４章　ダム建設の記憶とその構造——「ぶれ」と「濁り」の創発力——

第Ⅱ部　表象に埋め込まれていく開発——開発映像のポリティックス——

第５章　「開発映画」の誕生

第６章　立ち上げられる開発の表象——映画『佐久間ダム』は何を描き、何を描かなかったのか——

第７章　『佐久間ダム』を観た／観せたのは誰か——映像の浸透と再編される権力構造——

第８章　可視化と不可視化のポリティックス——映像化の現場——

第９章　映画人たちの動員と抵抗——「高度経済成長」の先へ——

終章　新しい「復興」の時代を前にして

３　各章の要旨

課題と方法をまとめた序章に続く第Ⅰ部は、開発に向けた動員／参加の体制が、佐久間ダム建設をめぐる一連の出来事を通じ、国家・県域・村落という異なるスケールを横断しながら形成されていく過程を描き出す。

第１章「「残された国土」に充たされていく開発」は、まず国家レベルを舞台に、復興期

の開発ナショナリズムと米国占領下のTVA幻想とが出会う場において、啓蒙のプロジェクトとしての開発政策が立ち上げられていく過程を明らかにする。

だが1950年代、開発とは「中央」主導ではなく「地方」主導の出来事であった。第2章「郷土建設から県域スケールの開発制度へ」は、「郷土」建設をめざす静岡県の開発運動が、佐久間ダムという外来の開発政策と呼応し、多くの軋轢を抱えながらも、そこから徹底的に地元利益を引き出す道を選ぶまでの過程を描き出す。この過程を通じ、開発利権の分配を基盤とする政官財トライアングルの原型が形成される。

ただし「上から」の力だけでは開発は進まない。佐久間ダムは、戦後日本でもまれな「地元での強い反対のない」ダム開発であった。それはなぜか。第3章「「開発」受け入れのローカルな基盤」は、緊張をうちにはらむ開発事業が、村民によって受容されていく過程を検討する。集合行動に関するフレーム分析の手法により、情報ゲイトキーパーとしての役割を果たしたリーダー層による「開発する主体」の形成／動員の重層的なメカニズムが、村広報の内容分析などを通じて明らかにされる。

ダムの存在は、今もなお、開発に対する屈折した意識を住民に残している。第4章「ダム建設の記憶とその構造」は、2002年に著者らが実施した町民意識調査の結果をもとに、「開発の記憶」の構造（「強さ/弱さ」「濃さ/淡さ」）を明らかにした。開発を「抱きしめた」佐久間においては、「想起」ではなく「忘却」が「記憶の政治」の中心に位置する。開発幻想からの脱却のためには、ぶれや濁りを含む記憶をもう一度活性化させる必要がある。

以上が、開発現地へと順次降りていく過程を扱った第I部である。開発は、戦後日本において、制度／行為／心性として、なぜこれほどまで幅広く根を張ることができたのか。この問いに答えるためには、開発現地だけでなく、開発とは一見無縁の大都会を含めた全国においても、開発主義が立ち上げられる過程を明らかにする必要がある。第II部は、この課題に取り組む。対象とするのは、産業記録映画『佐久間ダム』（第1～3部、総集編、1954～1958年）である。

第5章「「開発映画」の誕生」は、まず『佐久間ダム』撮影に至る経緯について、偶然的要因と構造的背景の混在を明らかにする。

第6章「立ち上げられる開発の表象」は、映像内容の特質を、「何が描かれていないのか」という逆説から分析する。それは、電力の効用を訴えかけず、建設者の労苦を描かない。また建設の「犠牲者」に目を向けず、建設の「恩人」すらも登場させない、「奇妙な」産業記録映画であった。

しかし、地味なＰＲ映画にもかかわらず『第一部』は300万人以上の観客を獲得する。「実際に観られた」点に本作品の最大の特徴があった。第7章「『佐久間ダム』を観た／観せたのは誰か」は、大蔵省主計官や天皇から都市大衆、村の移動映画教室に至るまでに広がった上映過程を、資料と調査によって再現する。多分に偶然的に組織化されたこの「観る」過程は、結果的に、生成途上にある開発レジームの主要アクターを「的確に」巻き込んでいく。ここにおいて『佐久間ダム』は「開発映画」としての位置を獲得していく。

とはいえ、映画制作者はスポンサーの言いなりだったわけではない。第８章「可視化と不可視化のポリティックス」は、発注企業側と映画制作者側との駆け引きの実際を、演出担当者の手書きノートなどをもとに詳細に再現していく。「「ロマンと工程」か、技術記録か」というねらいが衝突するなかで、制作者側は妥協を余儀なくされる。しかしこの過程で盛り込まれた表現の「揺れ」は、文脈に応じた多様な解釈の可能性を作品に付与していく。

第９章「映画人たちの動員と抵抗」は、『佐久間ダム』完成以後も、「ＰＲ映画」製作の現場に留まり続けた黒木和雄らの模索を追いかける。資本主義批判の意図をも含む作品群は、映像の斬新さゆえに、皮肉にも、到来する企業社会のイメージ向上へと貢献する。だが、高度成長の進展とともに開発・産業のイメージ喚起力はむしろ低下し、開発映画の時代は終わる。

終章では結論を述べるとともに、2000 年代に入り再浮上した開発ブームや開発主義の背景とその意味について論じた。

４　論文の結論

第１に、一つのダム、一本の映画によって開発主義イデオロギーが意図的に創出され流布された、というような単純な図式は、本論文の結論からもっとも遠いところにある。しかし、たとえば一本の映画すら、その企画から撮影、編集、上映、配給、鑑賞、批評に至る一連のプロセスを通じて、ローカル、ナショナル、そして国境を越えるアクターたちの行為と思いがけず共振していく。無数の行為の間に多様な関係が累積し、意図しない出来事の連鎖が姿を現す。これら連鎖に沿いながら「開発的なるもの」を支える心性が生成される。

第２に、しかし――あるいはそれゆえ――、「開発的なるもの」の中心は空洞のままであった。佐久間ダムは、確かに一時、戦後開発を生成する動きの中心にあった。だが、ダムの存在自体はもともと人びとの視野の外にあり、心性だけが高度成長期に引き継がれていく。

第３に、開発は、初めから不平等で格差生成的であった。開発現地の「総合開発」を期待して受容された佐久間ダムは、現実には大都市圏向けの電力供給をねらいとしていた。開発プロジェクトは、現地の地域社会を解体していっただけでなく、中心と周縁の格差を拡大・固定化していく効果をもっていた。

内側に大きな亀裂を抱えながらも、構造と心性に関わる制度が相互に補強し合いつつ国家単位で開発主義というひとつのレジームを形成していったのが、戦後日本の経験であり、それは震災後の現在にまで引き継がれている。